

「今や古典：20、21世紀に誕生したコンチェルト10曲」

伊藤美由紀（2400文字）

前回の特集記事としてピアノ独奏曲を10作品選曲したので、今回は、幅広く様々な楽器を取り上げてみたい。現在まで、各々の楽器奏者のレパートリーとして生き続け、オーケストラ公演でも取り上げられる機会の多い作品を主体に紹介する。コンチェルトの場合、作曲家はソリストとなる楽器に精通した奏者のために書く事が多く、当時の名演奏家、作曲家の知人に捧げて書かれた作品が多い。

最初に、コンチェルトのなかでは一番多いピアノ協奏曲から始める。ピアニストとしても活躍し、大きな手を武器にヴィルトゥオーソ的な演奏から迫力あるピアノ曲を書き、自作自演をした作曲家2名をあげる。

■ラフマニノフ / 《ピアノ協奏曲第3番》(1909)

ロシア・ロマン派音楽の代表とする作品であり、作曲家によりニューヨークで初演された。彼の出世作であり知名度の高い《第2番》は、1900年の作品で19世紀最後の作品となるので、《第3番》をあげる。ラフマニノフ自身、身長2m以上で巨大な手の持ち主であり、ピアニストにとって技術的にも音楽的にも難関曲で、初演以降、嫌厭されていたものの、ラフマニノフとも交流のあったホロヴィッツや、ギーゼキングらの理解、演奏により後世のピアニスト達の重要なレパートリーのひとつとなった。

■バルトーク / 《ピアノ協奏曲第2番》(1931)

リスト直系の弟子であり、ピアニストとしても精力的に活動したバルトークは、リスト音楽院でもピアノ教授としてピアノ教育に熱心であった。この作品も難関曲であり、バルトークの特徴でもあるピアノの打楽器的な扱い、金管楽器の煌びやかな音色、打楽器の激しいリズム、野性的かつ民族的、激しい情熱的な作品である。2楽章では、ピアノにトーンクラスターも使っている。作曲家本人により初演されている。

追記として、左手のみで演奏されるピアノ協奏曲を1曲あげる。

■ラヴェル / 《左手のためのピアノ協奏曲》(1930)

第1次世界大戦で右手を失ったウィトゲンシュタインによる委嘱作品が何曲もあるなか、ラヴェルの作品が一番有名である。コントラバス、コントラファ

ゴットの低音により神秘的に始まる。ピアノ鍵盤全部をまるで両手で演奏しているかの華やかさを、左手のみで奏でる高い難易度の作品であり、左手のみで活躍するピアニストのみならず、ピアニストの重要なレパートリーとなっている。中間部にジャズ的な要素が含まれ、オーケストラとの絶妙な掛け合いもラヴェルらしい。

次に弦楽器ソロによる協奏曲を3曲あげる。

■プロコフィエフ / 《ヴァイオリン協奏曲第1番》(1917)

パリでの初演の評価は芳しくなかったものの、観客として聴いていたヨーゼフ・シゲティに作品を気に入られ、ヨーロッパ、アメリカでの公演ツアーで再演され国際的な評価を受けるようになった。技巧的な2楽章のスケルツォを始め、叙情的で美しい旋律など、ヴァイオリンの特性を網羅した魅力的な作品である。

■シュニトケ / 《ヴィオラ協奏曲》(1985)

ユーリ・バシュメトの為に書かれ、彼の名前の B-A-Es-C-H-Mi として曲に織り込まれている。管弦楽には、ヴァイオリンが使用されず、ピアノ、チェンバロ、チェレスタを含む。ソリストは、全曲を通して休み無く弾き続ける。重音、微分音など高度な技術、音楽性を含み、ヴィオラの多彩な音色が散りばめられており、バシュメトにより作品の魅力が最大限に発揮された。

■デュティユー / チェロ協奏曲《遙かなる遠い世界》(1970)

ロストロポーヴィチの為に書かれ、タイトル、5楽章の各々の副題は、ボードレールの詩集『悪の華』所収の「髪」から引用されている。詩の象徴的、神秘的で夢のような世界観を表現している。4名の打楽器奏者が更に神秘的な音色を加え、緊張感のあるチェロのパスセージ、魅惑的な音色が、オーケストラと対話しながら聴衆を引き込む。

最後に、日本人作曲家の作品を中心にその他の楽器による協奏曲を4曲紹介する。

■イベール / 《フルート協奏曲》(1933) (CD: 『フルート協奏曲集・パユ』)

現代フルート奏法を確立し、多大な影響を与えた20世紀を代表するフルート奏者であり、イベールと1歳違いのマルセル・モイーズの為に書かれた作品で、この初演によりモイーズの名声も高まった。

■吉松隆 / アルト・サクソフォンとオーケストラの為の《サイバーバード協奏曲》(1994) (CD: 『サクソフォン協奏曲サイバーバード・須川展也』)

須川展也の委嘱初演による作品。ピアノとパーカッション奏者も独奏者として扱っており、フリー・ジャズの要素も含んでいるドラマチックな作品として、サクソフォン奏者に愛されている。2楽章は、サクソフォンとピアノ用に作曲家が編曲して《悲の鳥》として、二重奏版でも有名である。

■伊福部昭 / オーケストラとマリンバの為の《ラウダ・コンチェルタータ》(1976/79) (CD: 『伊福部昭作品集 2011』)

シロフォンの為に書かれた作品をマリンバ用に改訂し、マリンバのソロ楽器としての知名度を国際的に高める事に貢献した安倍圭子により初演され、マリンバ奏者のレパートリーのひとつとなっている。祈るような旋律、野性的なエネルギーあふれるリズムに満ちた伊福部作品特有の民族色の濃い作品である。

■細川俊夫 / 笙とオーケストラの為の《うつろい・なぎ》(1996) (CD: 『うつろひ・なぎ 細川俊夫作品集 音宇宙 VII』)

笙の為の現代音楽作品の普及に貢献し、国際的に笙の作品を広めている宮田まゆみの為に多々書かれた作品のなかの一つである。オーケストラは、左右対称に配置されており、笙とオーケストラの応答する響きのバランスにより生まれる梵鐘のような響きが、宇宙的な永遠の時間のなか、微妙に変容し独特の音響空間を生み出す。

ソリストの作品に対する深い理解度、音楽に対する感性、卓越した技術から生み出される演奏によって、作品は後世まで生き続ける。また、作曲家もそういう演奏家からインスピレーションを得て新たな可能性に挑戦し続ける。